

ドイツ民俗学と日常研究

ドイツチュービンゲン大学民俗学研究所の村についての日常研究を中心に

LEE Sang-Heong

李 相賢

安東大學校

(訳：中村和代)

1. はじめに

1970年から数年にわたり、チュービンゲン (Tübingen) 大学の民俗学研究所は、村の日常生活を研究目的として、近隣の農村であるキーピングゲン (Kiebingen) 村¹の調査を行った。「日常」(Alltag) アルタークの研究とは、単純に反復される日常ではなく、多様な人々が集まり生活する空間としての日常を指すものである。それは一般的に、E・フッサール (Edmund Husserl) の「生活世界 (あるいは生世界)」(Lebenswelt) の認識論に基づくものであり、主に「日常生活研究」あるいは「日常生活世界研究」と称され、様々な学術分野で成立している。

生活世界を現象学的に捉えた A・シュッツ (Alfred Schütz) の研究がその皮切りとなったが、以降日常研究が各分野で本格的に展開され、民俗学や人類学など文化を最も重要な概念として捉える研究分野においても、文化の形成と変化に関わる個人と集団間の分析に活発に取り入れられた。

ドイツの民俗学では、日常研究の影響がライフヒストリー研究、物質文化研究、労働者文化研究、民衆文化史、そして村の研究に及んだ²。特に村の研究において、過去の発表が主に村を共同体として認識するものばかりであり、村に住む個々の人々への関心がほとんど示されていなかったため、日常研究の導入と活用がドイツ民俗学の新しい研究傾向を明らかにするものであると認識できた。

よって本稿は、ドイツ民俗学の村の日常研究でも代表的な研究業績として評価を受けているキーピングゲン村研究の背景と過程を分析し、これをもとにドイツ民俗学の日常研究の特徴を提示することを目的とする。

本稿では、まず 1960～70年代、H・パウジンガー (Hermann Bausinger) 主導のチュービンゲン大学民俗学研究所の研究傾向と特徴を紹介していく。そのために、この研究所で行われた 1950年代のパウジンガー主導の移住地域研究について、簡略ではあるが説明が必要である。なぜなら、キーピングゲン村の調査研究で中枢的な役割をしていた U・イエグレ (Utz Jeggle) は、当時研究所に在籍しており、キーピングゲン村の研究も影響を受けていたからである。

そして、キーピングゲン村調査研究の過程と特徴の分析を行う。これは、村の住民の生活と民俗をテーマにした研究だが、研究途中に抱えた問題の解決過程で日常研究の必要性が提起されたものなのである。

ドイツ民俗学の日常研究の中でも、テュービンゲン大学の民俗学研究所、特にイエグレの日常研究の考察に至ったのは、筆者が在籍し長く学んだ場がこの研究所であり、研究所の研究傾向と特徴についての詳細な把握が可能だったからである。また、この研究所の所長を長い間歴任していたバウジンガーの研究業績は既に日本語で翻訳・紹介されており、日本の民俗学界では、ドイツの他大学の民俗学研究所よりも広く理解を得ることができると思えた点が大きい³。そして、なによりイエグレが研究所の中でいち早く日常研究に関心を持ち、行った多様な研究の存在は大きく、イエグレのキーピング村調査研究を対象とすることが適していると考えたからである。

2. テュービンゲン大学民俗学研究所の移住地域研究：村の社会学的研究

終戦直後の1945年、テュービンゲン大学民俗学研究所は、東欧圏に居住し終戦後西ドイツへ移住した、いわゆる「故郷から追放されたドイツの人々」(Heimatvertrieben)についての調査を進めた。当時、ドイツの各研究所では、移住したドイツ人の西ドイツへ移住前に共有していた言語と民俗について集中的な調査事業を行っており、この調査もそのような事業の一つだったと推定される⁴。

しかし、テュービンゲン大学の民俗学研究所は、1950年代中盤からこの調査の内容と方法を変更する。新しい調査の方向設定と推進は、この研究所で博士号をとったバウジンガーが中心となり、他2名の研究員と行った⁵。調査対象は、戦後に造成されたバーデン＝ヴュルテンベルク州の21カ所の移住地域で、ここには東欧圏から移住したドイツ系住民、統一前の東ドイツの地域から移住した住民、そして西ドイツの他の地域から移住した住民が居住していた。

21カ所の移住地域は、地形上の位置、そして居住人口の規模と特性がとても多様なため、一定の形式での記述は避けたが、次の五つの項目は必須として挙げた。一つ目は、移住地域の歴史として特に戦後の歴史、二つ目に地理的特徴、三つ目に人口構成の特徴、四つ目には社会および宗教生活の特徴、最後に移住地域の様々な問題点などであった。

5項目の具体的な内容として、移住地域の歴史では主に開発の歴史と建設主体、地理的特徴では移住地域の生態学的環境や周辺地域との関係、人口構成の特徴では住民の出身地域と職業などについての記述があった。また、社会生活の特徴では、家族や親族との生活や隣近所との関係、地域内の様々な同好会活動、例えばスポーツ同好会などについて記述しており、宗教生活の特徴として、住民が通うカトリック教会とプロテスタント教会の活動の特徴に言及していた。最後に移住地域の問題として、住民の文化的特徴が考慮されない文化施設の問題や、出身地域の文化的な差による隣近所との葛藤、移住地域の新しい文化の中に生じた家族間の問題などを記述していた。

そして第2部では、21カ所の移住地域の調査内容の分析を行っている。分析は、大まかにまとめると、移住地域で運営されている集まりと社会組織、新しい移住生活に活用される民俗、移住地域の計画樹立と運営、最後に故郷に対する認識などについてであった。

移住地域で組織運営されている集まりと社会組織として、その集まりや組織を構成する移住民

の出身地域、世代、居住の位置などで区別し、新しい環境に対応するために営まれてきた機能や役割について取り上げた。

新しい移住生活に活用される民俗の分析では、「文化的資産」を挙げている⁶。移住地域は、様々な地域の多様な文化を持つ人々で構成されていた。移住民は、共同体生活を維持するために、移住前の地域で伝え学んだ文化について、新しい意味付けを行った。彼らの文化的資産についての内容は、それまで民俗学者たちが関心を持ち研究してきた分野であったが、バウジンガーを中心とした研究チームは、移住した先で新しく形を変えた文化資産について関心を持ち、変化した形態の新しい意味や変化の主体についての分析を行っている。

移住地域の計画樹立と運営についての分析では、主に移住地域の設計に関与した会社の移住地域計画樹立の特徴と展開過程に注目している。特に、移住地域に居住しながら発生する様々な問題と、解決のために行った住民の努力を記述し、この件についての代案の提示も行った。

そして、移住地域住民の故郷に対する認識についての分析では、主に時・空間的次元から進められていたが、特に過去、特定の空間についての記憶と回想が、故郷を認識する上での土台となっていた。中でも、東欧圏から移住した人々の場合には、故郷についての認識が強く残っていることが確認できたことを記述している。

この調査の研究チームは、移住地域の住民が故郷を認識する段階と、各段階別文化的資産の活用方法、出身地域による故郷認識の差、そして定着時期別の故郷認識の変化などを分析している。一般的に彼らの故郷認識は、定着初期に不安感が増大し、その後同郷の人と接触しながら郷友会のような社会組織が結成され、多様な方法で故郷についての関心を表明する、などのように3段階に展開されることが把握できた。ただ、このような故郷への認識と活動の段階や活用された文化的資産の種類は、移住民の出身地別、世代別、そして居住期間によって多くの差が現れていた。

研究チームは、故郷について移住民の認識上の特性を分析し、これをもとにドイツ民俗学研究の核心的な用語の一つである「部族(Stamm)」について論じた。特定地域で同じ文化を共有しながらドイツ語を使用する集団を意味する「部族」は、自分の地域を中心に置き、他地域の住民を否定的に認識する時に活用されるのだが、このような姿は調査対象である移住地域でも現れた。彼らは、この用語が民俗学研究で客観的事実として通用していることを問題点として指摘している。

この調査研究は「民俗・社会学的調査」という副題がつくほど、社会的な脈絡を重要視したものだ。過去の民俗学の村の調査のように、特定民俗が持続されている現場としての村、共同体生活を営む空間としての村ではない、戦後ドイツの変化した村社会の特性を反映しようとした点でその業績が評価されている⁷。

バウジンガーは、この調査研究をもとにフォークロリズムについての新たな理解を促し、文化産業と観光についても、新しく認識しなければならない必要性を提起した⁸。そして民俗学の基本的な概念、例えば連続性、共同体、部族、規範などに対する批判的な検討を持続的に進めた。彼が1959年、テュービンゲン大学民俗学研究所の所長として赴任した後は、研究所の研究方向も変化し、説話の代わりに通俗文学研究を、民謡の代わりに歌謡研究を、残存物の歴史的由来よりも社会的機能についての研究を、方言の言語学的研究の代わりに言語社会学的研究を志向した⁹。

1960年代までテュービンゲン大学民俗学研究所は、過去の民俗学に対する批判的研究が主となり、1970年代、特にファルケンシュタイン (Falkenstein) 学術大会以降は、民俗学の新しい研究方向を提示することに力点を置いた。

3. テュービンゲン大学民俗学研究所の名称変更とキーピング研究：村の日常文化研究

「68学生革命」が、西ヨーロッパとアメリカの大学生を中心に活発に進められていた1969年、ドイツのデトモルト (Detmold) でドイツ民俗学学術大会が開催された。この学術大会では、ドイツ民俗学の政治社会的立場、民俗学的理論、民族・民衆を意味する「Volk」という用語の持続的使用の可否についての議論が活発に交わされた。そして1年後、ファルケンシュタインで特別学術大会が開催され、これらの件について本格的な議論が行われた。

この学術大会に参加した学者は、「民俗学は対象と主体の相互作用の中で、文化的価値についての伝達を分析する学問」であり、「社会文化的な問題の解決に、一定の役割をすることが研究の目的」だということに合意をした。合意以降、ドイツの各大学の民俗学研究所は、文化と「Volk」についてそれぞれの理解に基づき、研究所の名称の検討や、新しい研究活動の方向を設定するなど、様々な活動を展開した。

テュービンゲン大学民俗学研究所では、この学術大会以降、「Ludwig-Uhland-Institut für Empirische Kulturwissenschaft」(以下 EKW 研究所)と名称を変更している。研究所の名称変更には、ファルケンシュタイン学術大会の議論だけでなく、1970年代のドイツの大学教育改革も一定の影響を及ぼしていた。当時大学教育改革は、州によって差は存在していたものの、改革により単科大学を専攻分野で細分化して複数の専攻を履修できるようになり、研究所の運営規定は研究所の教授に一任されるようになった。

1969年、EKW 研究所で「ヴェルテンベルク地域のユダヤ人村」という主題で博士学位を取ったイエグレ(当時研究員)は、1970年から数年にかけキーピング村と近隣地域を調査した。調査結果は、学術大会での発表や雑誌への寄稿のほか¹⁰、単行本でも出版された¹¹。

キーピング村の調査は、バウジンガーの移住地域調査のように、特定の村の変化像を調査し、民俗の変化した意味を分析する目的で実施された。調査チームは、村の住民と「ラポール」(Rapport)を形成するため、民俗と関連する多様な村の行事を主管したのだが、このような調査チームの活動は、地域の新聞に報道されるほど住民から好反応を得られ、それにより調査も円滑に進められた。

ただ、特定の民俗を調査する過程で、村の特定人物の影響力や、その他政治・社会領域での影響力などに関する質問については、村の住民からはっきりとした返答を得ることができなかった。調査チームは、住民がこのような情報を外部の人間に公表することを嫌がると判断し対策を講じる中、キーピング村の住民でありテュービンゲン大学の学生であるアルバート・イレン (Albert Ilien) に会う。

彼は、村内の同好会活動に積極的に参加しており、調査チーム同様村の文化に多くの関心を寄せる人物であった。さらに彼の妻は村の小学校の教師で、住民との交流も活発に行っていた。彼

は調査チームに参加し、調査チームが必要としている情報を住民に伝え、収集した情報については数々の解釈の可能性を提示する役割を担った。

彼が調査チームに合流しながら、この調査研究の目的が「調査地域と人々の日常世界で現れる独特な性格」¹²(*eigensinnigen Charakter der untersuchten empirischen Welt*)、換言すると「村の住民の独特な日常世界についての研究」として変更された。また同時に、住人の独特な思考と行動がどこから出発しどのように変化したのか、その過程についての調査も進められた。それは、現在の村についての調査だけでなく、歴史資料の収集や整理にも及んだ。

調査チームは、キーピング村の住民の思考と行動に見える独特な特徴として、住民間の相互不信、財産に対する強い執着、一貫性のない家庭教育、清潔さに対する執着などを挙げた。また、住民の貧しさへの直接的な原因が均等相続と多産にあるとし、これらが隣近所に対する不信、兄弟姉妹間の葛藤、遺産相続過程での詐欺などのような、多様な問題を誘発したと分析した。そして、住民のこのような文化的特徴は、19世紀、この村が農村から労働者の村へと変化する過程で登場するようになったと認識し、関連する歴史資料の収集に努めた。

キーピング村に関する歴史資料は、1790年以降現在まで地域アーカイブに抜け落ちることなく蓄積されており、1820年代から1890年代後半までを中心に、当時の住民の土地所有関係、村内の位相などに関したすべての資料を収集した。

調査チームは、収集した歴史資料を五つの研究対象に分類し、生活世界の分析を行っている。一つ目は、農業を主業としていたキーピング村が、産業化、近代化される過程での特徴を取り上げている。具体的には、村内の修道院の売却と住民の購入、ネッカー(Neckar)川の整備過程の中で発生した官と住民の葛藤および協働、行政体系の変化、教会の役割変化などであり、最後に1823年に作成の村の地図に現れていた家と人々についての記述であった。

二つ目は、村の住民、特に農民とその労働についての特徴である。農耕地活用の特徴、農産物の種類と生産量の変化、行政単位である「*Gemeinde*」が農事のための協議体として変化する過程の記述と、衣食住生活の特徴、家事労働において老若男女の役割分担、そして家族財産の分配および統合の様相を記述していた。また、出生記録と不倫による出生問題の記録をもとに、住民の性生活の分析も行っていた。当時は、女性たちが受ける過酷な労働により乳児の死亡率が高く、一方で下層階級の人々は経済的な苦しさから結婚できず私生児の数も多かった。1970年代の調査当時、住民の子供たちへの相対的な無関心は、このような歴史的経験と関連があるものとして認識された。続いて19世紀の村祭りに関する記述があり、労働の強度や貧富格差による社会的な問題が存在しても、家庭と村の存続のために祭りが持続されたことを論じていた。

三つ目は、住民の財産の維持と活用についての記述であり、財産の保有形態によって村の住民を、上流層、中流層、下層など三つの階層に区分し、1823年から1897年の間、各階層の財産の変化過程を調査している。また、財産の流れを分析するために、女性配偶者の階層と所属、出身地域を調査し、財産分配過程も追跡した。そして、これをもとに当時親族概念が強化される過程を具体的に提示し、各階層別の事例を通し富に対する住民の意識の分析も行っていた。

四つ目は、村の住民の認知体系の特性の記述であり、本人と本人を含めた集団、他人、物(家、農地、家畜など)、自然などに分類し、項目ごとの住民の認識特性を分析している。住民は、全

一般的に家族および親族間に強い連帯意識を持ち、他人に対しては不信任感が強く、物に対しては強い愛着心を持っており、自然に対しては脅威でありながらも制御が必要な対象だと認識していた。このような村の住民の認知体系についての分析は、過去の調査内容を住民の立場で整理するための方法として、住民の主観的な考えを表すことに焦点が置かれていた。

五つ目の記述は、村の動的な変化像である。具体的に新しい農作物の栽培と農機の導入などに代表される農業経済の特性、村内の手工業の変化過程とその特性、個人会社の形成の背景とその過程を取り上げ、最後に低所得層が持続的にプロレタリア化 (Proletarisierung) される過程の分析を行っていた。

村の変化における動的な要因についての分析は、産業化や近代化、または新しい変化への住民の対応を調べるのが目的であった。特にイエグレは、19世紀のキービンゲン村の変化像に注目し、労働と所有の関係の変化から、社会、政治、宗教生活の変化を分析した。

キービンゲン村の研究は、それ以前の民俗学とは違い、住民の生存空間であり他の住民との共存の現場という前提で、村を共同体として一括りにせず、階層、性など多様な集団として区分して扱っており、特に住民の思考と行動を中心にその集団の生存方式、資産獲得、維持のための努力、基本的本能の充足方法と社会的制裁などを分析している。

またこの研究は、住民生活の淵源とその変化過程から現在の住民の日常生活を体系的に理解するため、歴史的な研究を試みている¹³。住民の歴史的経験が考慮された日常生活研究についての見解は、イエグレの日常についての認識にはっきりと現れており、彼は「日常とは、多様な個人と集団が生活する特別な世界として、個人あるいは集団の歴史的経験が反映された特定対象に対する、彼らの認識方法を見せるもの」と定義した¹⁴。このような見解をもとに、彼はキービンゲン村の住民が、土地、自動車、家畜などの財産や、子供、親戚、近所の人に対し、民俗学者あるいは大都市に住む人々とは違う考えを持っている点を明らかにしようとした。

イエグレとその調査チームは、分析において他の民俗学や人類学者のように、個別構成員たちが他人と生活しながら形成し変化する文化に注目していたが、そこには労働と生産方式を土台に文化が形成されるというマルクスの文化概念が存在していた。

もちろん、このような文化概念は、イエグレだけでなくEKWの大半の教授が共有しているものであった。例えば、イエグレの日常生活に関する論文が収録されていた民俗学概論書で、文化分野を記述したG・コルフ (Gottfried Korff) は、文化は「社会—生態的カテゴリーとしての生の方式」と強調した。具体的に文化を研究するためには、日常生活の物質的環境が検討されなければならないと、同時に個別の時代と空間に流通している規範、価値、態度などもこれと関連し分析する必要があると主張した¹⁵。

マルクスの文化概念は、同時代に東ドイツの民俗学者が行った「文化と生世界」(Kultur und Lebensweise) についての研究を通じ、その有効性が立証されている。ファルケンシュタインの学術大会で、階層による文化研究、特に被支配層である女性、労働者などについての研究を主張したテュービンゲン大学民俗学研究所の研究者は、東ドイツ民俗学の文化概念について多くの関心を傾けた。イエグレもまた、日常生活に対する民俗学的研究の方法論を提示しながら、資本主義社会の政治経済的要素から影響を受ける日常生活を、批判的に分析したフランスの社会学者であ

りマルクス主義者、H・ルフェーヴル (Henri Lefebvre) の理論を、積極的に援用した¹⁶。

しかし、イエグレのキーピング村研究では、村の住民の共同体性より階層による生活研究があまりにも強調され、特に村の上流層についての分析では他の階層より内容が少ないだけでなく否定的に記述されたという批判が提起された。また、19世紀から1970年代までキーピング村の歴史が抜け落ちているということも批判の対象だった。例えばナチス政権当時、この村の上流層と下流層の関係が以前と同じように持続されたのか、そうではなかったのかについての分析が抜けているということも、問題として指摘された。

4. その後のドイツ民俗学における日常研究

イエグレが発表したキーピング村の研究以降、ドイツ民俗学では多様な日常研究が進められた。ここでは、特に日常史についての研究を紹介しよう。イエグレのキーピング村調査に同行したW・カシューバ (Wolfgang Kaschuba) とC・リップ (Carola Lipp) は、キーピング村の研究で、イエグレとは異なる研究対象や時期、研究方法で、日常史研究を行っている¹⁷。

彼らは、研究対象の時期を、産業化に入る前の18世紀中盤からナチス時代までの約150余年間に設定し、研究対象には、家族や親族、その他の社会組織、村内の各職業群を選んだ。そして、村の経済、社会、文化的均衡が産業化時代を迎え変化が生じる中、住民の生存のためその一部が破壊されたり、既存の要素の均衡が新しく再統合される過程を分析した。

また別の特徴として、住民の歴史的経験を主要な概念として活用し、産業化以前の時期に村の不平等構造の中で形成された経験が産業化過程で表現される様相を研究したという点である。例えば、家族生活、またはその他の社会生活で、道徳や行動規範の持続と変化要素を記述し、その基本的な特性を村の住民の歴史的経験として研究を行っている。

彼らが、住民の社会的変化に適応する根拠を分析するため使用した歴史的経験という概念は、英国の歴史学者E・P・トムスン (Edward Palmer Thompson) が、労働者研究の中で示したものである。彼らはその分析をもとに、過去150余年間の住民の社会的な変化の中に日常生活の規則を提示しようと努めた。

前で言及をしたが、イエグレは村の日常を分析する上で、政治的抑圧と経済的不平等の側面を強調したルフェーヴルの日常研究の理論を活用したことにより、日常の変化についての研究が可能になった。カシューバとリップのキーピング村研究は、イエグレの研究とは研究対象など一定の差はあるが、村という微視的世界の中で生活する多くの個人と集団の考えや行動を分析したという面で、イエグレの村研究に影響を受けたものだ。これらのことから、イエグレの村研究はドイツ民俗学の日常史研究発展の助力となったと言える¹⁸。

また、カシューバはその後、村の日常史研究をもとに労働者文化の研究を行っている。具体的には、19世紀から20世紀初頭の、農村地域から移住した都市の労働者が新しい日常に適応するため移住前の農村地域の経験を活用したという点に注目し、労働者文化の研究に取り組んだのである¹⁹。それまでの民俗学でほとんど扱われていなかった労働者の文化研究は、彼の研究以降活性化された。ただ、彼の研究は、ドイツの民俗学界よりも歴史学界の、特に日常史研究者から高

い評価を受けた。

ドイツ民俗学の日常史研究で、例えば村の場合であれば、住民の思考と行動を分析するため歴史文書を新しく読み直し再解釈している。また、イエグレのように、現在の村の日常を過去の生活の連続で理解し分析しようという民俗学者は、歴史資料以外に住民の日常生活と関連した現地調査資料にも関心を持ち収集する。収集した資料を、調査対象者の特徴、そして研究者の研究目的に合わせ整理し解釈するので、このような研究のためには、体系的な現地調査方法論についての研究が強調されるしかない。

イエグレは、キービンゲン村調査の経験をもとに、研究対象の日常生活が考慮された現地調査方法論の研究に着手し、ドイツ民俗学では最初の現地調査に関する研究書と同じ研究意識を持つ研究者とともに共著で出版した²⁰。彼は、この本でドイツ民俗学の現地調査の歴史を批判的に分析し、日常研究のための調査方法論を提示した。また、他の研究者たちは、日常研究のための現地調査の戦略と方法、そして根本的な限界などについて議論した。

ドイツ民俗学で、日常史または日常文化など日常に関する研究や現地調査方法論の構築は、イエグレが行ったキービンゲン村研究やEKW研究所の研究の影響とだけ見ることはできない。社会学、歴史学など、民俗学の隣接分野での日常についての関心と研究も、ドイツ民俗学の日常研究への関心と発展に一定の影響を与えている。

ドイツの歴史学界の場合、1970年代から「裸足の歴史家」(Barfußhistoriker)を自任する学界非主流の若手知識人の「歴史工房」(Geschichtswerkstatt)運動で、日常史研究が試みられた。彼らは、近代化・産業化に対する肯定的な認識をもとに、統計資料を中心に研究を進めてきたそれまでの歴史的社会科学を批判した。そして、庶民(kleine Leute)の衣食住、労働と余暇生活、家族および隣近所の関係など、日常的な姿に多くの関心を持ち研究した。

彼らの研究は、ドイツ民俗学界における日常史研究の助力になった。例えば、伝統的なドイツ民俗学の物質文化研究は、主に外形的特徴、住宅様式、衣装の形態などに関心を寄せ研究していた。しかし、日常史に関心のあるドイツの民俗学者は、歴史学者の日常史に関する研究結果を活用し、住宅の外形についての研究から、特定住宅に居住する人々の住居文化へ視点を変え研究を行ったのである²¹。

本稿では、基本的にEKW研究所の日常研究にだけ注目した。他大学の民俗学研究所の日常研究を紹介しないまま、ドイツ民俗学の日常研究の始まりと発展方向を提示したことを、問題点として指摘できるだろう。例えとして一つ挙げれば、ドイツ民俗学で最初に日常研究を標榜し、1970年代ファルケンシュタイン学術大会以降、研究所の名称を文化人類学へ変更した、I・グレヴェルス(Ina-Maria Greverus)の日常研究についての紹介ができなかった。そのため、ドイツ民俗学の日常研究について体系的な紹介が満足に進められなかったという思いがある。このような問題点を認め、最後にドイツ民俗学、そして隣接分野の日常研究に対する関連学界の批判を簡略に述べようと思う。

1990年以降、日常研究、特に日常史についての研究の限界や問題点が指摘されはじめた。まず極端な場合ではあるが、ナチス時代の研究で、特にライフヒストリーに関する研究において、加害者と被害者のナチス時代に対する記憶は極端に二分されており、それに関する研究は相対的

に見て難しい。

また、女性についての日常史研究の限界が指摘された。女性についての研究は、主に既存の歴史学研究ではあまり進めることができなかったが、日常史研究では比較的活発に研究されていた。しかし、特定時期の女性の考えと行動を分析する上で、当時の家族や女性文化などと関連して分析せず、今の女性たちの考えをそこへ投影して分析したり、あるいは当時の女性の立場だけを中心に研究することが問題点として指摘されている。

日常研究のこのような問題点は、基本的に研究者が特定の新しい生活と行動を、文化の観点でのみ解釈する傾向と関係がある。例えば、ヨーロッパ諸国において外国人嫌悪症の背景と過程を説明する上で、これを文化的な境界戦略の一環として理解し、そこへ動員される要素、または社会的問題などをもとにその行動の特性が分析されることがある。しかし、これは明らかに不純な政治的動機からはじまったものとして、客観的な理解よりもまず批判的に捉える必要がある。

日常と文化の研究は、様々なディシプリンで研究されたもののように、多様な理論、そして方法論について、多くの苦悩が必要な研究分野だ。日常研究は、現在、そして過去の歴史の中で、主流の勢力ではないが特定社会を構成する多様な人々の日常的な生を理解する上で、肯定的な役割を果たした。しかし、人種問題や政治的闘争など以前には経験できなかった様々な行動が発生するこの時代において、日常研究が人間理解という学術研究に活用されるためには、批判的な態度をとる必要がある²²。

他にも、日常研究は学術的な実践活動に多くの限界があるという点が指摘された。例えば、日常研究の学術的成果をもとに、各博物館で特定の時期の日常文化について展示を行ったが、大衆的な関心を引くことができず、研究者からも批判を受けた。失敗の原因として、展示対象および技法の問題、あるいは日常文化を効果的に展示するための対象選定の原則が提示できなかった点など、様々な問題点が指摘された。これは、博物館の展示問題に限定されず、日常研究の対象選定と方法にも、同一の問題が発生する可能性があるという点を提示する例だと考えられる²³。

ドイツ民俗学の日常研究の特徴を理解するためには、研究背景と過程についての理解も必要だが、1990年以降ドイツ民俗学をはじめ日常研究を進めたディシプリンで提起された日常研究の問題点も、ともに考慮しなければならない。併せて、ドイツ民俗学の日常研究方法と理論を活用し民俗学の新しいパラダイムを構築しようとする国では、このような批判的な声にも関心を持つことが必要である。

注

1 キーピング村は、ドイツ西南部のバーデン＝ヴュルテンベルク (Baden-Württemberg) 州に属し、ドイツ南部地域のカトリック行政本部があるロッテンブルク (Rottenburg) 市、そして教育都市であるテュービンゲン市の間に位置している。この村に関する最初の記録は1204年に登場しており、当時は貴族ホーエンベルク (Hohenberg) の領土であったが、1381年にオーストリアへ売却され、1806年にはヴュルテンベルク王の領土として帰属された。20世紀に入り、行政的にロッテンブルク市に属している。戦後にテュービンゲン市、そして1971年に再びロッテンブルク市に属するようになった。

2 Carola Lipp, 'Alltagsforschung im Grenzbereich von Volkskunde, Soziologie und Geschichte', *Zeitschrift für*

- Volkskunde* 88, 1993, pp.12 ~ 19.
- 3 本稿を準備しながら、日常研究、特にドイツの日常研究に関する日本民俗学の研究として、法橋量, 2010, 「現代ドイツ民俗学のブルーリズム—越境する文化科学への展開—」『日本民俗学』263号を参考とした。
 - 4 これらの研究を、ドイツの民俗学者たちは「Sprachinselforschung」(孤立した言語研究)として表現し、研究内容は東欧圏で他の民族とともに居住していたドイツ人たちのドイツ語研究だった。それは、次第に「民族交流 (Interethnik) 研究」として変化する。これに関しては、Ingeborg Weber-Kellermann/Andreas C. Bimmer, *Einführung in die Volkskunde/Europäische Ethnologie*, Stuttgart, 1985, p.131 ~ 133.
 - 5 この調査は、次の書籍として出版された。Hermann Bausinger, Markus Braun, Herbert Schwedt, *Neue Siedlungen, Volkskundlich-soziologischen Untersuchungen des Ludwig-Uhland-Institut Tübingen*, Stuttgart, 1958.
 - 6 引用した本では、特定財産もしくは所有物を意味する「Güter」という題でこの項目を記述し分析したが、大部分の分析対象が、方言や格言などの言語民俗、伝統衣装、郷土料理などの物質民俗、そして民間信仰などの宗教民俗なので、本稿ではこの用語を「文化的資産」と翻訳した。
 - 7 Ingeborg Weber-Kellermann/Andreas C. Bimmer, *Einführung in die Volkskunde/Europäische Ethnologie*, Stuttgart, 1985, p.130. また、他の研究業績としては Wilhelm Brepohl, *Industrievolk im Wandel von der agraren zur industriellen Daseinsform, dargestellt am Ruhrgebiet*, 1957 を挙げる。
 - 8 Hermann Bausinger, *Volkskunde. Von der Altertumsforschung zur Kulturanalyse*, Berlin, 1971, p.141 ~ 209.
 - 9 Hermann Bausinger, 'Zur Entwicklung des Ludwig-Uhland-Institutes', *Attempto*, Heft 49/50, 1974, pp.60 ~ 67.
 - 10 キーピングエンに関する最初の記述は、Utz Jeggle, 'Urbanisierung ländlicher Entscheidungsstrukturen'. Gerhard Kaufmann(Hrsg.), *Stadt-Land-Beziehung. Verhandlungen des 19. Deutschen Volkskunde-Kongresses in Hamburg vom 1. bis 7. Oktober 1973*, Göttingen 1975, pp. 65 ~ 80 である。この記述は、当時ドイツ民俗学の都市に関するテーマで開催された学術大会で発表された。この他にキーピングエンに関する記述として、Albert Illen und Utz Jeggle, 'Zum Recht der kleinen Leute auf wissenschaftliches Verstandenwerden, am Beispiel Hausens, einer Gemeinde im Urbanisierungsprozeß', Konrad Köstlin und Kai Detlev Sievers, *Das Recht der kleinen Leute*, Berlin, 1976, pp.88 ~ 97, Utz Jeggle, Albert Illen, Willi Schelwies, 'Verwandschaft und Verein. Zum Verhältnis zweier Organisationsformen des dörflichen Lebens'. *Forschungen und Berichte zur Volkskunde in Baden-Württemberg*. Bd.3, 1977, pp.95 ~ 104.
 - 11 Utz Jeggle, *Kiebingen - eine Heimatgeschichte*, Tübingen, 1977, Albert Illen, *Prestige im dörflicher Lebenswelt*, Tübingen, 1977, Albert Illen und Utz Jeggle, *Leben auf dem Dorf. Zur Sozialgeschichte des Dorfes und Sozialpsychologie seiner Bewohner*; Köln und Oplanden, 1978.
 - 12 Herbert Blumer, 'Der methodologische Standort des symbolischen Interaktionismus', Arbeitsgruppe Bielefelder Soziologen(Hg.), *Alltagswissen, Interaktionismus und Ethnomethodologie*, Hamburg 1973, pp.104. この文は Utz Jeggle, *Kiebingen - eine Heimatgeschichte*, 前の文献の 278 頁に再引用されており、イエグレのキーピングエン村調査と関連する数々の記述でも引用された。この文は「調査された経験的世界の固有の性格」と直訳することができるが、本稿では意訳した。
 - 13 Utz Jeggle, *Kiebingen - Eine Heimatgeschichte*, p. 280.
 - 14 Utz Jeggle, 'Alltag', Hermann Bausinger 他, *Grundzüge der Volkskunde*, Darmstadt, 1978, pp.125
 - 15 Gottfride Gorff, 'Kultur', Hermann Bausinger 他, 前の文献, pp.62.
 - 16 Utz Jeggle, 'Alltag', Hermann Bausinger 他, 前の文献, pp.103 ~ 104.
 - 17 Wolfgang Kaschuba/Carola Lipp, *Dörfliches Überleben. Zur Geschichte materieller und sozialer Reproduktion ländlicher Gesellschaft im 19. und frühen 20. Jahrhundert*, Tübingen, 1992.
 - 18 Wolfgang Kaschuba, *Einführung in die Europäische Ethnologie*, München, 2003, p.127.
 - 19 Wolfgang Kaschuba, 'Volkskultur und Arbeiterkultur als symbolische Ordnungen. Einige volkskundliche Anmerkungen zur Debatte um die Alltags- und Kulturgeschichte', Alf Lüdtkke(Hrsg.), *Alltagsgeschichte. Zur*

- Rekonstruktion historischer Erfahrungen und Lebensweisen*, Frankfurt 1989, pp.119 ~ 223.
- 20 Utz Jeggle(Hrsg.), *Feldforschung. Qualitative Methoden in der Kulturanalyse*, Tübingen, 1984.
- 21 Projekt Gruppe, 'Geschlechtsspezifische Muster der Raum- und Dingeaneignung'. *Gestaltungs- spielräume. 4. Tagung der Kommission Frauenforschung in der Volkskunde*, Tübingen, 1992.
- 22 Wolfgang Kaschuba, 'Kulturalismus: Vom Verschwinden des Sozialen im gesellschaftlichen Diskurs', *Zeitschrift für Volkskunde* 91, 1995, pp.27 ~ 46.
- 23 Carola Lipp, 前の文献, pp.26 ~ 27.

参考文献

- Bausinger, Hermann/Braun, Markus/Schwedt, Herbert, *Neue Siedlungen, Volkskundlich-soziologischen Untersuchungen des Ludwig-Uhland-Institut Tübingen*, Stuttgart, 1958.
- Bausinger, Hermann, *Volkskunde. Von der Altertumforschung zur Kulturanalyse*, Berlin, 1971.
- Bausinger, Hermann/Jeggle, Utz/Korff, Gottfried/Scharfe, Martin, *Grundzüge der Volkskunde*, Darmstadt, 1978.
- Blumer, Herbert, 'Der methodologische Standort des symbolischen Interaktionismus', Arbeitsgruppe Bielefelder Soziologen(Hg.), *Alltagswissen, Interaktionismus und Ethnomethodologie*, Hamburg 1973.
- Illen, Albert, *Prestige im dörflichen Lebenswelt*, Tübingen, 1977.
- Illen, Albert und Jeggle, Utz, *Leben auf dem Dorf. Zur Sozialgeschichte des Dorfes und Sozialpsychologie seiner Bewohner*, Köln und Oplanden, 1978.
- Jeggle, Utz, 'Urbanisierung ländlicher Entscheidungsstrukturen'. Gerhard Kaufmann(Hrsg.), *Stadt-Land-Beziehung. Verhandlungen des 19. Deutschen Volkskunde-Kongresses in Hamburg vom 1. bis 7. Oktober 1973*, Göttingen 1975.
- Jeggle, Utz/Illien, Albert/Schelwies, Willi, 'Verwandschaft und Verein. Zum Verhältnis zweier Organisationsformen des dörflichen Lebens'. *Forschungen und Berichte zur Volkskunde in Baden-Württemberg*. Bd.3, 1977.
- Jeggle, Utz, *Kiebingen - eine Heimatgeschichte*, Tübingen, 1977.
- Kaschuba, Wolfgang/Lipp, Carola, *Dörfliches Überleben. Zur Geschichte materieller und sozialer Reproduktion ländlicher Gesellschaft im 19. und frühen 20. Jahrhundert*, Tübingen, 1992.
- Kaschuba, Wolfgang, 'Kulturalismus: Vom Verschwinden des Sozialen im gesellschaftlichen Diskurs', *Zeitschrift für Volkskunde* 91, 1995.
- Kaschuba, Wolfgang, *Einführung in die Europäische Ethnologie*, München, 2003.
- Lipp, Carola, 'Alltagsforschung im Grenzbereich von Volkskunde, Soziologie und Geschichte', *Zeitschrift für Volkskunde* 88, 1993.
- Lüdtkke, Alf(Hrsg.), *Alltagsgeschichte. Zur Rekonstruktion historischer Erfahrungen und Lebensweisen*, Frankfurt, 1989.
- Weber-Kellermann, Ingeborg/C. Bimmer, Andreas, *Einführung in die Volkskunde/Europäische Ethnologie*, Stuttgart, 1985.